〔翻　訳〕

生きた論理学

――ヘーゲル論理学における生命概念の意義――

アンネッテ・ゼル
牧　野　廣　義（訳）

訳者まえがき

2012年３月に阪南大学の外国研究者短期招聘制度によって，アンネッテ・ゼル氏（ドイツ，ルール大学，ヘーゲル・アルヒーフ共同研究員）が来日された。ゼル氏は，現在刊行中の『ヘーゲル大全集』の「論理学講義」の編集を担当されている女性研究者である。ゼル氏は，1997年にハイデガーのヘーゲル解釈に関する研究で博士号を取得され，2010年にはヘーゲル論理学における生命概念の研究で教授資格を取得されている。

３月17日（土）に阪南大学サテライトで「研究フォーラム」が開催され，ゼル氏に講演をしていただいた。テーマは「生きた論理学――ヘーゲル論理学における生命概念の意義」であった。講演はドイツ語で行われ，私が司会と講演の日本語訳を担当し，討論では大河内泰樹氏（一橋大学社会学部准教授）が通訳を担当された。本論は，この講演の翻訳である。

ゼル氏は，この講演でまず「論理学」と「生命」とはなぜ結び付くのかを論じた。ヘーゲルの「論理学」は単なる思考の形式の学問ではない。思考は世界の論理的本質をとらえることができ，しかも思考も世界も弁証法的に運動し発展するものである。論理学が「死んだ形式」の学問ではなく，世界の運動と発展をとらえる「生きた論理学」であるためには，「自然の生命」をモデルとして「論理的な生命」をとらえる必要がある。「生命」は「生きた個体」として有機的組織をもち，外的世界とかかわって，外的世界との矛盾をもちながらもそれを克服して生存する。さらに「生命」は他の個体との関係をつくりあげ，子どもの再生産を行う。こうして「生命」は「類」として発展する。このような「生命」の論理をとらえることが，人間の「精神」をとらえる前提ともなるのである。

ゼル氏のこのような講演に対して，参加者からは，ヘーゲル哲学の発展史における「生命論」や，哲学史・宗教史や経済学との関係，さらには今日の環境保護との関係などの質問も出された。これらの質問に対しても，ゼル氏は丁寧に回答された。３時間にわたる講演と討論の後も，懇親会の場で，さらにドイツの社会や文化の問題も含めて，参加者との間で議論がはずんだ。

無断転載禁止

阪南論集　人文・自然科学編　Vol. 48 No. 1

生きた論理学
――ヘーゲル論理学における生命概念の意義

生命という概念は哲学史の伝統的な概念です。その起源は古典古代にまでさかのぼります。そこでは，「ビオス」と「ゾエ」との区別が行われました。「ビオス」は人間の生き方や生活の仕方を示し，「ゾエ」は植物や動物や人間そのものの生命を示します。プラトンの場合，生命はすでに自己運動として考えられました（Phaidros 245c7-8）。そこでは生命の原理は魂です（Phaidon 105c-d）。アリストテレスの生命概念は多様なものです。『形而上学』第12巻では，アリストテレスは思考の活動を生命と呼びました（Met. XⅡ.7 1072b28）。さらにアリストテレスの生物についての見解は『魂論』をあげることができます。ヘーゲルはそのうえに，アリストテレスの生命の規定はすでに内的合目的性を含んでいるという業績を加えています（Enz1830, §204）。プロチノスは思考，生命および存在という概念を関連づけて考えました（特にEnneade Ⅲ,8）。そこでは，生命は観察されるものであるのと同様にまた観察するものそのものです。プロチノスは，「アウトゾエ」について語りますが，この自己生命はすでに知性的領域にあります。このような哲学史の経過は中世を通じ，そして近世の全世紀を通して進みました。またドイツ観念論においても生命概念はさらに展開されました。この概念の歴史は現代にまでおよびます。現代では生命はとりわけ倫理学や生命倫理学において，同様に生命科学において根本的で多様な役割を果たしています。さて，生命は確かにすでに思考との結びつきにおいて，とりわけ認知能力との結びつきにおいて考えられてきましたが，しかし生命についての周知の着想や諸概念を考慮しながら，生命を論理学の中に位置づけるという哲学的挑戦が存在します。ヘーゲルは生命を彼の『大論理学』の高い位置に置きます。とはいえヘーゲルの場合，生命は論理学の中に登場するだけではありません。生命の概念はヘーゲルの体系の他の部門でも同様に現れます。その場合，自然哲学が際立った役割を果たすことがさらに以下で示されるでしょう。それに加えて，ヘーゲルにおいて生命概念は，宗教哲学では神の生命として，法哲学では人倫的生命として，美学では生きた芸術作品として，重要です。この講演では，論理学における生命をテーマとしたいと思います。しかし，論理学と生命とを同時に論じることは，両立しないのではないでしょうか。にもかかわらずこの両概念を関連づけるべきだとすれば，両概念を正当に評価するために，生命と論理学はそれぞれどのような性質をもったものでなければならないのでしょうか。ヘーゲルは，『大論理学』の概念の論理学において「論理的生命」について語っており，このことによって論理学と生命とを結びつけます。ヘーゲルが論理学の中で生命概念を使用する場合，明らかに次のような紛糾が存在します。つまり，一方で生命は具体的なもの，感性的なものと結びついているけれども，他方で論理学は感性や外面性の契機をもたない純粋に論理的な諸規定を問題にしなければならない，ということです。その点で，ヘーゲル自身は次のように言います。「生命の理念は具体的な対象に，もっと言えば，実在的な対象に関わるので，論理学の普通の表象によれば，生命の理念は論理学の領域を超えているように思われるであろう」（GW12,179）[1]。この講演では，次のようなテーマについて議論を展開したいと思います。つまり，生命の概念はヘーゲルの『大論理学』においてその場所を見いださなければなりません。なぜなら，論理学が同時に形而上学でもある弁証法的な論理学は，体系上，生命の概念を要求しているからです。このような論理学の要求は，思考の学問であるということです。そこでヘーゲルは，思考諸規定ないし諸カテゴリーがいかに必然的に相互に自己を発展させて，すべての思考可能なものを包括するかを示します。しかしそのような論理学は何ものをも前提してはならず，何ものをも外部から付け

無断転載禁止

加えてはなりません。それゆえそのような論理学は純粋に，無前提に，直接的に始まらなければなりません。それは自分で自分自身を最終的に根拠づけなければなりません。ヘーゲルは，有の概念において論理学の純粋な始まりのためのこのような必然的な性質が与えられていることを見ます。論理学の最初の部分は，それに対応して，有の論理学です。そこでは，有の諸規定（質，量，および限度）が問題となり，諸規定は一方から他方へと移行します。続いて，本質の論理学では，関係の諸カテゴリーが詳しく論じられます。ここでは，本質は反省として問題になります。反省とは，自分自身に関係する否定性です。論理学のこの部分において，弁証法的思考にとって重要な矛盾の概念が考察されます。矛盾はヘーゲルによれば，回避する必要のあるものではなく，一種の「原動力」として思考諸規定をさらに運動させるものです。それゆえ否定性は諸規定の進展にとって決定的な役割を果たします。有の論理学と本質の論理学とは客観的論理学を成します。なぜならここでは客観の思考が問題だからです。ヘーゲルが主観的論理学と名づけた概念の論理学への移行は，概念をその主体性において考察することを可能にします。概念とは，全論理学を担い，有と本質との統一をなすものです。そこでは概念はさまざまな契機を通して自己を展開して，主観性と客観性とが理念において最終的に相互に合致します。このような論理学の目標は，主体と客体とが，内的かつ外的に，動的な統一において相互に合致することによって，達成されます。論理学はこの最高地点を絶対的理念において見いだします。「論理学は純粋な理念についての学問である。すなわち思考の抽象的な基盤における理念についての学問である」（GW20,61）。

この講演で論じようとする生命は，概念の論理学の理念の編に論理的な位置をもっています。そこでは概念はその外的なものから，すなわちその対象から解放されているとされます。理念においては，概念と実在性との統一が与えられています。ヘーゲルは理念を適合した概念と呼びます。「この理念はしかし概念自身の必然性によって導き出された」（GW12,179f）。論理学は，思考諸規定が必然的に相互に自己を発展させる弁証法的運動において，最終的に成立します。論理学は絶対的理念でもって静的な最終地点に到達したのではなく，そこにおいて，ヘーゲルによれば自然というそのまったくの他在に，自分を解放します。このことはそれ自身として問題になることですが，ここでは立ち入った論究をすることはできません。

この講演では，続いて次の議論を行いたいと思います。すなわち，いかにして生命はこのような論理学と結びつくことができるのかということです。そのために，第一に，ヘーゲルの理念という概念が論理学における生命の前提であることを示します。第二に，論理的生命について叙述する必要があります。それはヘーゲルの理論の推理構造を吟味するためです。結論では，直接的理念と論理的理念とを踏まえて，生命についての思考と論理学という観点から検討の結果をまとめたいと思います。

Ⅰ　直接的な理念

理念が概念と客観性との統一として成立するならば，この統一はまず直接的に生命において実現されると，ヘーゲルは言います。それゆえ，生命は理念の第一段階です。「直接的な理念は生命である」[2)]と，『エンチュクロペディ』の論理学の３つ版すべてが述べています。そしてヘーゲルはこの命題でもって生命に関する章を始めます。その章は論理学の中の理念に関する編の中にあります。主観性と客観性とが相互に合致するとされる理念は，論理学の目標であり，同時に最高の規定です。したがって，生命概念はこの著作の展開過程において高い位置を与えられています。そのことによって，生命には，純粋な論理学の探求の内部における配置の困難性があるということは明白であり，さまざまな研究文献によっても指摘されてきました。それゆえ，直接的な理念としての生命について

無断転載禁止

解釈が必要です。ヘーゲルが，諸概念に直接性，個別性あるいは外面性を帰属させるときには，それは常に暫定的な立場を問題にしていることを表示するものです。その立場は，弁証法的な運動によって止揚され，媒介されるものであり，またはそうされなければならないものです。ヘーゲルにおいては直接的なものは，常に他のものへの関係の中にあるということが際立っています。直接的なものは一面的なものであり，それは他の側面を必要とし，他の側面なしにはありえません。それゆえ直接的なものは媒介を必要とします。したがって媒介と直接的なものとは合致します。論理学の課題は，このような直接的なものの媒介過程を弁証法的に考察することです。なぜなら，ヘーゲル哲学によれば，真理ないし原理は前提されてはならず，真理は過程の中で結果として考察されなければならないからです。こうして，『大論理学』における始元において（また『精神の現象学』における始元においても）直接性の問題が登場します。有という始元は直接的でなければならず，その場合，まだ抽象的です。弁証法的な行程，すなわち媒介の過程においてはじめて，始元はその十分な真理性を証明します。この講演のテーマとの関連では，ここで考察される概念の論理学という新しい段階で――それゆえ理念のレベルで――ヘーゲルは再び直接的なものから始めるのであって，この直接的なものは，それが絶対的理念において自由な概念に到達するためには，弁証法的に媒介されなければならない，ということを見ることが必要です。しかしまさに生命は，直接的であるためには，どのような性質を前提にしているのでしょうか。ヘーゲル論理学の発展史を一瞥してみると，ヘーゲルは先行するニュルンベルク論理学の中では，生命についてまだ美を述べていました。しかし彼はこの試みをそれ以上は追求せず，それどころか1812年からの『大論理学』では，美を論理的生命の契機として考察することを拒否しました（GW12,180f. 参照）。こうして，生命は論理的な規定として理念編の内部にとどまっています。生命は自然的なものでありながら，確かにすでに概念によって浸透され，それゆえその前提はただ概念のみであって経験的な所与ではありませんが，しかし生命はそのことをまだ自覚せず，まだ主観と客観との直接的な統一として現存します。

生命のこのような規定は，主要には自然の生命です。そのことは，カール・ヘーゲルによる講義録の§215では次のように示されています。「理念はまず普遍的なものであり，直接的なものです。そこでは理念は自然であり，あるいはより明確には生命としてあります。理念は最初はあるいは直接的には自然です。しかしこの直接性は理念の根源的分割であり，外面性の中にある理念です。そのようにして理念は自然であり，理念は自分の外にあるものとしての理念です。このような自己外有の最高の段階が生命です」[3)]。すでに示唆しましたように，生命の概念はヘーゲルの全著作の中では，宗教的生命，美的生命，精神的生命，あるいは人倫的生命のように，多様な意味をもつものですから，このことの注意が必要です。しかし，生命は自然的なものとしてのみ，理念の最初の直接的な段階をなすことができます。というのはこの段階ではまだ認識は存在しないからです。他の学問分野では，つまり宗教，美学，および法の領域では，すでに精神的なものが存在します。しかし，生命においてはまだ認識は存在しないにもかかわらず，生命は理念の基礎ないし前提でありうるのです。ここに論理的生命についての全理論の核心があります。すなわち，自然的生命が，自分自身を類へと自己組織化するものとして発展する性質をもつことによって，生命は認識へと，それゆえ精神的なものへと移行する可能性を提供するということです。生命は自己運動であり，生命は類を形成するものです。そこで類はもはや直接的なもの，個別的なものではなく，普遍的なものです。そのさい，類は確かにまだ対自的にあるではありませんが（すなわち，ヘーゲルによれば，類は単純に存在するのはなく反省されたものであるとしても，類は

無断転載禁止

最初のものですが），しかし類は同時に個別性を超え出て理念の普遍性に至るものです。この過程が個々にどのようにして経過するかは，この講演の第二の部分でさらに論じたいと思います。生命は論理学においては認識へと，それゆえ認識のあり方へと移行します。

ヘーゲルの自然哲学を参照すると，そこで生命はまた，認識に対応する精神への移行をいかにして可能にするかが示されます。自然哲学においてもまた，自然は他在の形態における理念であるかぎり，理念がこの移行に関与します。自然が自らを展開した最高のものが，生命です。しかしその生命はまたまだ他在ないし外面性の中にあります。そこで生きた自然の理念は，この最高の段階においてすでに主体性の規定をもちます。自然は相互外面性としては，まだ力学（個別化）と物理学（特殊性）とであり，それらが自然哲学の生命に先行する二つの段階をなします。自然哲学の第三の段階である有機体論は，いかにして理念が生命において現存在に到達するか，つまり「まずは直接的な理念に，すなわち生命に」（GW20,S.344）到達するか，を展開します。理念は自然において，外面性以上には進むことができません。「その外面性とは死であり，生きたものとしてあるために自己内に至ることである。しかし死は，さらにまた自然が単に生命としてある規定を止揚して，精神の現存在を産出するものである。そしてこの精神が自然の真理であり，自然の究極目的であり，理念の真の現実性である」（GW20, S.241）。それゆえ生命としての直接的な理念は，自然の中で必然的に精神へと移行しなければならず，そのことによって精神のための前提を形成します。したがって，理念は，絶対的理念ないし精神へと発展するための，あるいは認識へと発展するための前提ないし基礎として，生命を必要とするのです。それゆえ，このような理念の構想が，ヘーゲルがなぜ生命を論理学におけるこの位置において論じるかを明らかにするのです。

さて，理念の概念をさらに詳しく考察することが必要です。概念の論理学の第三編「理念」への序論において，ヘーゲルはカントと直接に対決する仕方で，理念の概念を叙述しています。理念は真理なのであり，そこでは概念と客観とはもはや分離されず，両者は理念の中に包含されています。カントにとっては，理念は確かに必然的なものですが，客観的な妥当性をもたず，それゆえ客観についての概念は存在しえなのですが，それに対してヘーゲルは理念の中に概念と実在性との統一，ないし主観的なものと客観的なものとの統一を見ます。「経験の中には理念と完全に一致する対象は存在しないと言われるのであれば［ここでは，カントによって言われるのであれば，と補足しなければならないでしょうが］，理念は主観的な基準として，現実に対立することであろう。しかしもしも現実的なものの概念が現実的なものの中にはなく，現実的なものの客観性がその概念とまったく合致しないのであれば，現実的なものが真に何であるべきかを言うことができない。なぜならそれは無であろうからである」（GW12,174）。それゆえヘーゲルはさらに進んで次のように言います。「すべての現実的なものは，それが理念を自分の中にもち，理念を表現する限りにおいてのみ存在する」（GW12,174）。ヘーゲルは理念を，主観—客観として認識します。一方では，主観は客観に関係しますが，他方では，客観は主観をまだ直接に客観の中にもっていません。まだ概念の外面性が存在します。というのは，客観と主観とはまだ同一ではないからです。概念はそれゆえ——ヘーゲルの言葉では——まだ自由になっていません。しかし外面性はヘーゲル論理学では，次のことによって消滅します。つまり，外面性が概念の否定的な統一へと還帰して，言い換えると，客観性すなわち外面性が弁証法的な方法によって媒介され，受け入れられることによってです。このような仕方で，理念はまたもはや有限的でも不安定なものでもありません。理念は，こうして単純な真理として，関係および過程として考えることが

無断転載禁止

できます。そのさい理念は，固定した形成物ではなく，理念はそれ自身が運動であり，理念は自分をまず直接的なものとして示します。なぜなら，客観性は今や概念に適合してはいますが，概念はまだ自由になっていないからです。主観と客観とは確かに同一のものですが，しかしまだ直接的です。主観と客観との同一性は確かに現存しますが，しかし依然として反省されていません。理念の直接性は生命として与えられています。そして生命の過程の反省によって，直接性と個別性とはまた克服されます。こうして，理念はヘーゲル論理学の中で自己を発展させて，理念はその絶対的な真理にまで到達します。論理学が，概念と客観性とが一つとなる絶対的理念においてその到達点を見いだすべきであるならば，生命は直接的な理念を表現し，そのことによって絶対的理念の前提となるのですから，生命はこのような論理学の中にその場所を見いださなければなりません。生命を欠いては，理念は，したがって真理ないしヘーゲル論理学の全体は，空虚で規定を欠いたものとなり，絶対的なものの要求は満たされないでしょう。私の主張を言い表せば，生命は理念の基礎を形成しますが，同時に，理念は生命そのものであるということです。「理念は固定したものではありません。理念は過程であり，生命です。理念は自分を特殊的なものへと引き下げようと努めます。理念は永遠に移行するものです」。このように，フランツ・アントン・ゴートの1817年の論理学講義録，177ページに記されています。理念はそれゆえ過程として考えられなければなりません。理念は弁証法的な論理の経過の中で，自己自身を産出しました。理念において，概念と実在性とは，あるいは主観と客観とは，合一するとされます。このような統一をヘーゲルは適合した概念と呼びます。それゆえ絶対的理念としての概念の自由が，論理学の到達点です。理念についての以上の考察を背景に踏まえて，以下では論理的生命について，ヘーゲルがそれを『大論理学』の中でいかにとらえたかを論じることにしましょう。

Ⅱ　論理的生命

生命がなぜ論理学の中でその場所をもたなければならないのか，という体系的な前提を説明しましたので，これからは，この生命の概念がヘーゲルによってどのように考えられているのかについて論じたいと思います。これまでのところですでに『大論理学』のプログラムについての簡単な概観を見ました。概念は，論理学の最後の部門である概念論理学で論じられます。そこでヘーゲルは主観性，客観性，および理念を展開します。概念は論理学のこの部門の最も重要な概念です。また同時に概念は，有と本質の真理であり，それゆえ論理学の先行する諸部門の真理です。論理学全体の到達点は絶対的理念であるとされ，そこでは概念（ヘーゲルにとっては主体的なもの）と客観性（外面的なもの）とが合致します。そのような絶対的な要求をもつ論理学は――すでに述べたように――また生命を含んでいなければなりませんが，しかしそれは経験的な生命ではありません。なぜなら純粋な思考諸規定が問題にされなければならないからです。論理学には，「論理学が純粋な思想を」もっている限り（GW12,179），概念という前提のみが属します。しかしヘーゲルは生命の概念がもっている困難性を認識しています。なぜならこの概念は自然哲学および精神哲学においても同様にその重要な位置をもち，本来，現実ないし経験への関係をもっているからです。「生命という理念は具体的な対象に，いわば実在的に対象にかかわるので，論理学についての普通の表象によれば，生命の理念は論理学の領域を超えているように思われるであろう」（GW12,179）。しかしヘーゲルの論理学は，内容的かつ形式的な根拠に基づいて，生命のような概念を許容し，あるいは要求するのであって，生命は生命の理念として極めて高い位置に自分の場所をもつのです。なぜなら，もっぱら空虚で死んだ思考諸形式によってのみ特徴づけられるような論理学は，生命の理念を内容として含みえないからです。ここで次の重要な言葉

無断転載禁止

を引用してもよいでしょう。「論理学がもちろん空虚な死んだ思考諸形式に他ならないとするならば，その中ではそもそも理念あるいは生命のような内容は問題になりえないであろう」(GW12,S.178)。このようなヘーゲルの主張に基づいて，彼の論理学は従来の論理学とは反対に，生きた思考諸形式を包括するのであり，したがってまた，生命のような内容がその場所をもたなければならないことが結論づけられるのです。それゆえ生きた形式は生きた内容のための前提です。したがって，論理学の生きた形式は，生命の概念という内容のための前提であり，このような論理学の生命性に基づいて，生命の概念そのものがまた論理学の中に含まれなければならない，と言えるでしょう。ヘーゲルは生命を３つの形式に区分して，１．生きた個体，２．生命の過程，３．類，を論じます。

生命の第一段階は，生きた個体です。それはまだ個別的な生命です。ヘーゲルは生きた個体を特徴づけて，生命を魂として語ります。魂とは自分自身を運動させる原理です。ここで，これまでにすでに論じた自己運動という契機に再び出会います。しかし魂はまた生命性によって特徴づけられます。今や生命は肉体と魂との関係として考察されます。したがってまた，ここでは現実的な自然の生命が問題になるという外観が生じることでしょう。にもかかわらず，それは確かに論理的生命であるべきあって，論理的生命は自然や精神ではありません。このような要求にもかかわらず，ヘーゲルは生命の自然的形態を背景に踏まえて，理念の直接態を論じます。それは肉体と魂との関係のためにまだ外面性の形式をまとったものですが，しかしすでに概念的に媒介されています。生きたものの客観性をヘーゲルは有機体と呼びます。それは多くの肢体から成っています。そしてこの有機体はすでに概念によって「魂を吹き込まれて」いますので，有機体はまた概念の規定を，つまり普遍性，特殊性，個別性という規定をもっています。ヘーゲルは，概念論理学の主観性の編で展開された推理論の表現を用います。それゆえ，生命はまた推理の論理的作用に従って成立しています。「生きたものは推理である。その契機はそれ自身が自己内での体系であり推理である」。ヘーゲルは上にあげられた論理的諸規定（A 普遍，B 特殊，E 個別）を，動物有機体の規定に与えますが，それは『エンチュクロペディ』の自然哲学（§350ff）において展開するものと同様です[4)]。しかしまた逆に，彼は動物有機体の特徴に論理的諸規定を与えたとも表現できるでしょう。その特徴とは次のようなものです。

感受性は，神経における刺激の受容によって特徴づけられますが，直接的な普遍性（A）であるとされます。なぜなら，感受性は外面性を自分の中に受容するからです。感受性は外面的なものを受容するこの能力によって，普遍的なものであり，まだ分離されていないものでありえます。

刺激反応性は，外からの刺激に反応し，筋肉の活動に対応します。この刺激反応性によって概念は自分を特殊化します。このことによって生きたものは，外面性ないし客観性へと関係して，それとの相互作用に入ります。この能力によって生きたものは，さまざまな種に区分されます。それゆえ生きたものは，自分の中で自分を区別する特殊なもの（B）でありえます。

最後に，概念は以上の外面性から自分へと還帰し，そのことによって個別的なもの（E）へと還帰します。子どもの再生産において，生きたものは個別的なものとして生命にふさわしいものです。再生産はそれゆえ，最初の二つの形態の前提です。生きたものは，再生産によって生きたものを産出し，生きたもの自身を保存します。

以上の論理的な定式（A B E）によって，またヘーゲルが最初はシェリングの自然哲学から取り出した動物有機体（感受性，刺激反応性，再生産）の概念でもって，今や『大論理学』における直接的な理念の章で，生きた個体を規定するのです。それゆえ生きた個体の叙述の過程

無断転載禁止

はそれ自身が論理的なものです。

こうしてヘーゲルは，どのようにして生きた個体がまず自分自身に関係し，同時に他のものに，すなわち客観的世界に関係し，そして再生産するものとして生きたもの自身を保存するかを示します。しかしこのことによって生命の運動はまだ終わりません。なぜなら，生命的個体は弁証法的な運動によってすでに「生命の過程」に入り込むからです。これが生命の第二の形態をなします。しかし生きたものは，この生命の過程においてはまず，まだ疎遠な客観性に対して否定的に立ち向かうものとして自分を見いだします。そしてこの矛盾を苦痛として感じます。ヘーゲルはこの苦痛という概念によって純粋な論理学を超え出るように見えます。ヘーゲルはこの「実存的」な像によって，生命が客観的なもの，外面的なものと自分とを媒介するための統一に向かっていかに努力するかを示しているのです。生きたものは苦痛によってその統一を見いだすことへと，したがって世界と同一であることへと駆り立てられます。ヘーゲルは彼の論理学のこの部分において，生きた，社会的に把握された個体に関わります。ここでは，論理学の存在論的次元が問題なのであって，それは世界との関係の中にある個体の存在に関わります。

主体的な個別が今や客観的世界の中に存在するのであれば，その個別はその個別性を克服して，普遍性への移行し，それゆえ類への移行がなされています。生きた個体は，その第三の形態，すなわち「類」において，その他在と同一です。ここで生きた個体は他の個体と関係します。生きた個体にとって他の個体は疎遠な外面的なものではありません。類とともに生命の真理と完成が成し遂げられます。それゆえ類は，反省のない直接性からの前進の結果を含んでいます。類と普遍性とが存在するところでは，またすでにそれとともに認識が存在します。なぜなら個別は，今や意識的にあるいは反省的に自分に関係するからです。しかしそのさい，認識が登場しうるためには，生きた個別は崩壊しなければなりません。そのことによって絶対的理念へと向かうさらに進んだ歩みが成し遂げられます。

以上の考察によって次のことが明らかになりました。すなわち，ヘーゲルは生命をここでは外面的な現実性の表現，あるいは基礎として理解しているのではないということです。たとえしばしばこのような外見をもつとしても。生命の叙述における概念的な展開は，生きた個体および生命の過程を論じる節においては特に，生命は外面的世界と否定的に関係することを示します。そのようにして，肉体的なものと，外面的なものないし客観的なもの（しかし単に否定的なものとして）とは，論理学の構成部分です。それらは絶対的理念においてはじめて克服ないし止揚されるものです。それゆえ，論理学の内部において，論理学外的な諸契機が語られるのですが，しかしそれらは弁証法的に媒介され，否定的な統一の中へと止揚されます。このことは，外面的な現実性への関係が概念によって規定されていることを意味します。論理学は常にすでに概念の水準において運動します。こうして，これらの概念的な諸規定は，論理学ないし概念の弁証法的な構想をとおして，現実に対して否定的に関係します。経験的な現実は概念ではありません。それゆえ概念は経験に対して否定的に関係します。論理的な，経験的ではない生命は，このような仕方で自分を規定するものであり，それは概念的に把握された推理のあり方によって認識へとさらに発展します。そのさい推理は，ヘーゲルにとっては，一つないしいくつかの判断から別の判断を導き出すことではなく，二つの概念を第三の概念によって媒介することです。このような方法に従って，諸概念は自己運動し媒介されて，もはや単に一面でもなく，二面それ自体をもつものでもないような理念において，その絶対的な到達点を見いだすのです。概念は本質の論理学から概念の論理学への移行においてそれ自身を論理学の基礎としました。概念は「最も具体的なものであ

無断転載禁止

り，最も豊かなものである。なぜなら概念は，先行する諸規定の，つまり有と反省諸規定の諸カテゴリーの根拠であり総体性だからである。したがってまたこれらのカテゴリーが概念において現れるのである」(GW12,S.48)。(生きた弁証法的な）概念は，自己同一なもの，理性的なものとして，常に自分の中に対象の諸規定をもっており，そのことによって自己を発展させる能力をもっています。このような分裂と合一の可能性がまた概念の過程性と生命性を成します。概念の形式は普遍性です。概念は自分を普遍的なものと規定することによって，概念は特殊的なものであり，そして自己自身に関係する規定は個別性です。こうして概念は，普遍，特殊，および個別として弁証法的な運動そのものです。そのさい概念は主観的論理学の根本概念として，主体性であり，そして概念はそのようなものとしてまた自己関係的なものです。ヘーゲルは概念のこのような規定とその論理的な叙述を，判断および推理として概念論理学の中でさらに詳しく論じました。ここで概念は，概念が自然の生命のモデルに従って自己運動するものであるという意味において，生きた概念であることが確定されます。ヘーゲルは，論理的生命の運動と自然の生命の運動とを，分裂と合一との過程という同じモデルで考えています。自然の生命も生きた概念も，このような仕方で自己組織化するものであり，自己保存することができるものです。

Ⅲ　結論

以上でもって，直接的理念としての理念の概念と論理的生命との関連の探求を終えたいと思います。生命が論理学の中でその場所をもつためには，生命はどのような性質のものでなければならないか，生命が論理学の中に登場するためには，論理学はどのような性質のものでなければならないか，という上述の問いに対して，今や解答を与えることができます。理念が上述の仕方での到達点であり，したがって思弁的論理学の最高の契機であり，ヘーゲルによって展開された弁証法的な仕方で，主観と客観との統一として，それゆえ主観―客観として考察されるのであれば，生命を一定の形態において，つまり論理的生命として論理学の中に統合することは可能なことであり，それどころか必然的なことです。

直接的な理念とは何であるかという問いは，生命の概念によって，ここではとりわけ自然の生命の概念によって，答えられなければなりません。自然の生命において，それをヘーゲルは動物有機体に即して説明するのですが，ヘーゲルは一つの全体が自分自身を動かし，自分自身を組織化しうる仕方があることを見ます。しかしその全体は自分の自己運動を反省することはありません。このような自己運動と，再生産によって類を形成する能力によって，そして類がその過程によって普遍的なもの，およびそれとともに精神と認識を産出することにおいて，生命という理念は理念の基礎なのです。

以上のようにヘーゲルに内在してとらえた諸概念と議論とならんで，ヘーゲルが彼の概念の展開の土台として理解した哲学の歴史を考慮に入れる必要があります。カントへの参照によって，ヘーゲルがカントの理念の概念への批判を踏まえて，自分自身の位置をいかに獲得しているかが示されます。また生命の概念の構想において，とりわけカントの名をあげることができます。『判断力批判』の中の内的合目的性というカントの概念は，ヘーゲルによる生きたものの思索の手本としてあげることができます。有機体はそこでは形成する力として考察され，そこではすべてのものが相互に目的と手段をなします。プラトンとアリストテレスは魂の構想のモデルを形成しました。テキストに内在した解釈と，哲学史的な整理という方法論的接近によって，結論的に次のように言うことができます。すなわち，理念は生命の理念なくしてはその到達点に至ることができないであろうということです。主体と客体との直接的な統一としての生命は，同時に理念のさらに進んだ段階のた

無断転載禁止

めの前提です。それゆえヘーゲルに内在的して，生命なしには認識は存在しないであろうと主張することができます。認識は生命を前提とします。認識とは生きた認識です。しかし生命を理念の最初の必然的な段階として位置づけることはまた，ヘーゲルの理念の構想において，したがって論理学全体の構想においてどのような緊張があるか，そしてそのことによってそのような弁証法的で思弁的な探求がどのような困難性をもっているかを示すことになります。理念はヘーゲルにおいて，主観と客観との統一を可能とする真理でなければなりません。しかし人びとは，概念と対象とのこのような思弁的な統一ということで，生きたものの特性を正当に評価するでしょうか。ヘーゲル自身が，生命はその多彩さにおいて，そこでは思考にとって「すべての思想が尽きてしまう」ような，「概念的に把握されない秘密」であることを認めています。しかしヘーゲルは，自分自身に対するこのような非難をまったくまじめに受け止めているわけではないでしょう。なぜなら，ヘーゲルにおいては確かに最終的には，すべてを把握する概念が外面的な多彩さを凌駕するからです。

この講演では，生命の概念がいかにして獲得されうるかについて，一つの認識論的モデルを提示しようとしました。このモデルの長所は，思考の形式と内容が相互に関係し合うということです。それは，何において（対象として）いかなる思考なのか（つまり方法）が示され，またその逆でもあります。それゆえ対象と内容は恣意的に定立されるものではなく，自分自身から展開するものです。そのような観念論的で思弁的な方法が，生命の認識についての現代の討論にどのような貢献ができるのかは，確かに問われるべきものです。この講演はそのような問題設定を開始するという提起を意味します。

注

1）以下では，ヘーゲルの著作からの引用個所は次の大全集の巻数とページ数で示される。
G. W. F. Hegels *Gesammelte Werke*, in Verbindung mit der Deutschen Forschungsgemeinschaft herausgegeben von der Nordrhein-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, Hamburg 1968 ff.

2）G.W.F. Hegel, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse. (1817)*, Hamburg 2000, GW 13, 101; Ders., *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse. (1827)*, Hamburg 1989, GW 19, 169; Ders., *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830)*, Hamburg 1992, GW 20, 219.

3）G.W.F. Hegel, Vorlesungen über die Logik. Berlin 1831. Nachgeschrieben von Karl Hegel, Hamburg 2001, 209.

4）Vgl. *Enzyklopädie* von 1827 und 1830 § 354, *Enzyklopädie* von 1817 § 278.

（2012年７月13日掲載決定）

無断転載禁止